愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 14 号
2013.5
11-22p-

知多式以前

—松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器—

早野浩二

松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器を改めて分類し、編年的位置、系譜、出土状況について検討した。その結果、松崎遺跡における知多式０類以前の製塩土器は系譜が不連続であることを確認した。また、土器製塩の操業も小規模で、知多式１類以降の操業とは明らかな飛躍があることを示した。

はじめに

伊勢湾・三河湾沿岸における脚台式製塩土器については、立松彰（立松 1994）、森泰通（2005）による基礎的な研究がある。研究の流れと、論点の整理もこれらに詳しい。東海市松崎遺跡・上浜田遺跡は古墳時代から古代を通じて知多式製塩土器による土器製塩を大規模に行った知多半島随一の遺跡で、1976 年（松崎貝塚第１次・第２次発掘調査）、1998 年（上浜田遺跡発掘調査）、2004 年（松崎遺跡確認調査）に東海市教育委員会、1988・1989 年、2008・2009・2012 年に愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施されている（杉崎他 1977、立松他 1984、立松・永井 1999・2005、福岡他 1991）。

その松崎遺跡の脚台式製塩土器については、第１次調査Ⅰ区において出土した１点が「５類」として呼称され、「渥美式第１様式（Ａ類）に通ずるもの」で、田原市青山貝塚（遺跡）の調査を参考にして、その帰属時期は「５世紀後葉」か「少しさかのぼる」時期に求められた（杉崎他 1977）。同様の脚台式は第２次発掘調査Ⅵ区の「地山面上に堆積する」９層においてややまとまって出土し、改めて青山遺跡における渥美式Ａ類の出土状況に類似することが指摘された（立松他 1984）。

立松彰はこれらの脚台式製塩土器を「松崎類」として呼称し、渥美式Ａ類も含めて大阪湾沿岸の脚台Ⅱ式の影響下で成立したことを推察した（立松 1994）。松崎類の時期については、東海市塚森遺跡など知多半島基部において

図１　松崎遺跡・上浜田遺跡と関連遺跡の位置

出土する「塚森類」が脚台Ⅲ式に類似することから、松崎類から塚森類への変遷を想定しながらも、青山遺跡における出土状況を参照して、松崎類が大阪湾沿岸の編年より新しい「宇田式併行期」に相当するとした。また、これらよりやや法量が大きい松崎遺跡の脚台式製塩土器は「甕？」の「小型の台脚」として扱われ（立松他 1984）、「能登類似」ともされた。

松崎類の比較対象とされる渥美式Ａ類については、森田勝三が法量（脚径）を基準にＡ類１、Ａ類２、Ａ類３に細分し、時期については、Ａ類１を田原市畠貝塚における出土状況から「古墳時代前期前葉の４世紀初頭頃」、Ａ類３とそれに後続するＢ類を青山遺跡等における出土状況からそれぞれ「５世紀代」、「５世紀末から６世紀初頭頃」に、Ａ類２を伴出遺物は明らかでないとしながらも、Ａ類１とＡ類３の中間の「４世紀代」に想定した（森田 2001）。なお、渥美式Ａ類の呼称については、他の渥美式の細分に従って、以下、Ａ１類、Ａ２類、Ａ３類と呼称する（立松 2010 ｂ）。

改めて脚台式製塩土器を包括的に検討した森泰通は、塚森類が松崎類に先行するとして、松崎類から「不定型な一群」を介して、知多式０類（立松・永井 1999）が成立する過程を想定した（森 2005）。また、渥美式Ａ類については、Ａ１類とＡ２類・Ａ３類が時間的に連続しないことを指摘し、両者の系譜が異なることを示唆した。さらに、松崎遺跡出土の渥美式Ａ１類に類似する一群から、渥美式Ａ１類に遅れることなく、知多半島においても土器製塩が行われた可能性をも示唆したが、詳細は保留とした。

以上のように、松崎遺跡・上浜田遺跡における脚台式製塩土器は、その編年的位置と系譜に対する理解が不安定で、大阪湾沿岸、渥美半島の脚台式との対応関係にも課題を残している。小文においては、愛知県埋蔵文化財センターによる 2008 年度・2012 年度調査の新出資料を含め、改めて松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器の分類、編年的位置、出土分布を検討することで、より整合的な把握を試みることとしたい。

１．分類

分類

愛知県埋蔵文化財センターによる 2012 年度調査分までを含めて、松崎遺跡・上浜田遺跡において出土している脚台式製塩土器を「松崎Ａ類」、「松崎Ｂ類」、「松崎Ｃ類」、「その他」に分類する。分類の基準は法量（計測方法を図２に示す）、胎土・色調、焼成に依拠するが、「知多式０類」を含め、色調と焼成は各型式で明確に異なり、識別は比較的容易である（図３・表１）。

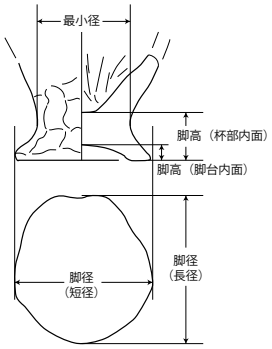


図２　脚台式製塩土器の計測方法

松崎Ａ類（図３- １～ 13）

淡橙色から橙色を呈し、焼成はやや軟質である。砂粒がわずかに混入する。計 13 個体が出土している。脚台の法量から脚径７cm 前後のＡ１類（１～６）、脚径６cm 前後のＡ２類（７～ 13）に細分される。

Ａ１類は６個体の計測値が脚径 7.2 ～ 7.4cm（平均 7.3cm）、脚高（脚台内面）0.6 ～ 1.0cm（平均 0.8cm）、最小径 4.2 ～ 5.6cm（平均 5.0cm）で、杯底部が平坦なものが多い。Ａ２類は７個体の計測値が脚径 5.4 ～ 6.6cm（平均 6.1cm）、脚高 0.6 ～ 1.6cm（平均 1.3cm）、最小径 3.4 ～ 4.0cm（平均 3.7cm）で、脚端部は内面に折り返される。

松崎Ｂ類（図３-14 ～ 18）

愛知県埋蔵文化財センター 2008・2012 年度調査において新たに出土した脚台式製塩土器で、計５個体を抽出した。黄橙色を呈し、堅緻に焼成されるが、いずれも脚台下半には黒斑を生じている。砂粒の混入は少ない。脚径 4.5cm 前後で、５個体の計測値は脚径 4.1 ～ 4.8cm（平均 4.5cm）、脚高 1.9cm（平均 1.9cm）、最小径 3.8 ～ 4.1cm（平均 4.0cm）で、Ａ類と比較して脚径は小さいが、脚高が大きい。

松崎Ｃ類（図３-21 ～ 47）

既定の「松崎類」に対応する脚台式製塩土器で、計 27 個体が出土している。赤褐色から褐色を呈する。堅緻に焼成され、黒斑はほとんど認められない。脚径（短径）３～４cm 前後で、後述のＣ０類（21・22）を除く 25 個体（23 ～ 47）の計測値は脚径 3.0 ～ 4.4cm（平均 3.7cm）、脚高 0.0 ～ 0.9cm（平均 0.4cm）、最小径 2.2 ～ 3.4cm（平均 2.6cm）で、脚下端はいずれも押し広げられた状態（23 ～ 27）か、つまみ出したままの状態（28）で、不整な楕円形を呈するものも多い。

上浜田遺跡においては、脚径 4.6 ～ 4.8cm（平均 4.7cm）、脚高 1.0 ～ 1.3cm（平均 1.15cm）、最小径 2.4 ～ 2.7cm（平均 2.55cm）で、脚径と脚高が大きい個体が２個体出土しているが、胎土、焼成の類似から松崎Ｃ類に含めた。21 は「不定形な一群」にも含められるもので（森 2005、立松 2010）、脚高が高い。22 は脚端部を内面に折り返す。個体数が少なく形

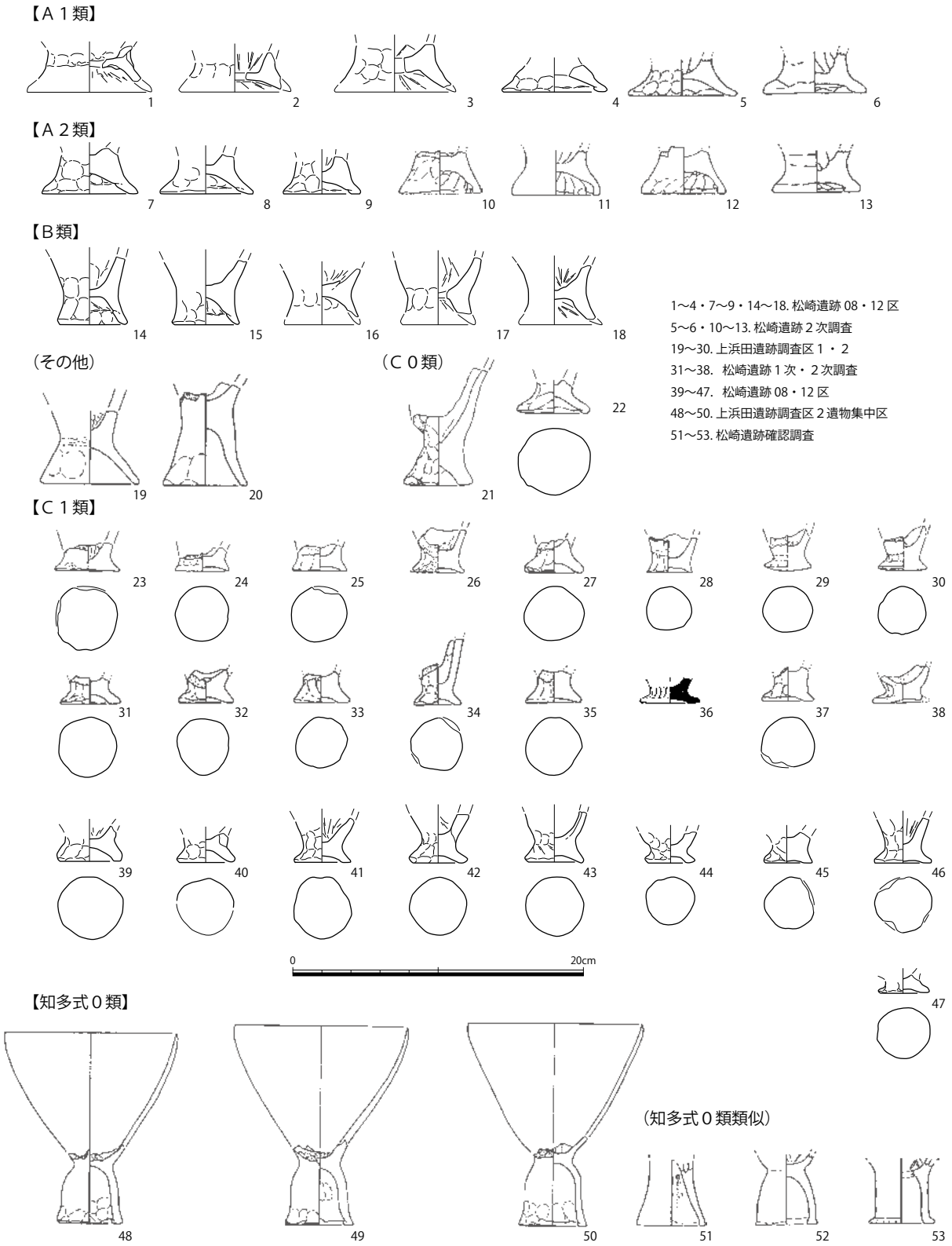


図３　松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器（松崎類）・知多式０類（1:4）

表１　松崎遺跡・上浜田遺跡脚台式製塩土器・知多式０類一覧（網掛は既報告資料）

分類	番号	報告書番号	調査区	グリッド	遺構・層位	計測値（cm）				
						脚径（長）	脚径（短）	脚高（杯）	脚高（脚）	最小径
松崎Ａ１類	1		08B	10C15n	2005SD	-	-	-	-	5.6
	2		08B	10C14o	2007SD	-	-	-	-	5.4
	3		08B	10C16n	2009SI	-	-	-	-	5.6
	4		08B	10C17n	B-F層漸位層	7.2	-	-	-	-
	5	図版13-28	松崎２次	Ⅵ区	９層	7.4	-	1.6	1.0	4.2
	6	図版13- 29	松崎２次	Ⅵ区	９層	7.2	-	1.4	0.6	4.2
松崎Ａ２類	7		08B	10C6o	B-客土1	6.6	-	2.7	1.5	3.8
	8		08B	10C9o	撹乱	6.4	-	2.0	1.4	3.8
	9		08B	10C6o	旧調査区	5.4	-	1.5	0.9	3.4
	10	図版12- 1	松崎２次	Ⅶ区	10層	6.4	-	2.4	1.6	3.6
	11	図版６- 18	松崎２次	Ⅶ区	11層	6.0	-	2.1	1.6	4.0
	12	図版６- 17	松崎２次	Ⅶ区	11層	5.8	-	2.4	1.5	3.6
	13	図版６- 30	松崎２次	Ⅵ区	９層	6.0	-	1.6	0.6	4.0
松崎Ｂ類	14		08B	10C15o	2012SK	4.8	-	2.4	1.9	3.8
	15		08B	10C15o	2012SK	4.1	-	2.7	1.9	4.0
	16		08B	10C15o	2005SD	-	-	-	-	4.0
	17		08B	10C15o	2012SK	-	-	-	-	4.1
	18		08B	10C15o	2020SK貝層	-	-	-	-	4.0
その他	19	第25図11	上浜田	調査区１G3		5.2	-	2.7	1.8	2.7
	20	第25図12	上浜田	調査区１G2/3		4.3	-	4.4	3.0	2.7
松崎Ｃ０類	21	第25図10	上浜田	調査区１F1	混貝黒褐色砂層	4.8	-	3.0	1.3	2.8
	22	第25図9	上浜田	調査区２H11	黒―黒褐色砂層	5.0	4.6	1.9	1.0	2.4
松崎Ｃ１類	23	第25図7	上浜田	調査区２I11	黄色砂層	4.4	4.4	0.7	0.1	3.2
	24	第25図3	上浜田	調査区１F1	黒色砂層	3.7	3.7	1.0	0.3	3.1
	25	第25図4	上浜田	調査区１FG2		3.7	3.7	1.0	0.3	3.0
	26	第25図5	上浜田	調査区１H2	褐色砂層	3.7	-	1.5	0.3	2.6
	27	第25図8	上浜田	調査区１G3	褐色砂層	4.1	3.7	1.7	0.6	2.3
	28	第25図6	上浜田	調査区１H3	黒色砂層	3.1	3.0	1.0	0.3	2.6
	29	第25図2	上浜田	調査区１H3	黄褐色砂層	3.4	3.1	1.8	0.0	2.2
	30	第25図1	上浜田	調査区１H2	褐色砂層	3.3	3.3	1.6	0.0	2.2
	31	図版13- 33	松崎２次	Ⅵ区	９層	4.1	4.0	1.4	0.6	2.6
	32	図版13- 31	松崎２次	Ⅵ区	９層	3.9	3.5	1.3	0.4	2.6
	33	図版13- 34	松崎２次	Ⅵ区	９層	3.7	3.4	1.8	0.4	2.4
	34	図版13- 35	松崎２次	Ⅵ区	９層	3.6	-	1.4	0.4	2.3
	35	図版13- 32	松崎２次	Ⅵ区	９層	4.0	3.8	2.2	0.3	2.3
	36	第７図38	松崎１次	第Ⅰ区Ａ区	黒褐色土層	4.0	-	1.0	0.3	2.4
	37	図版７- 26	松崎２次	Ⅵ区	北貝層	3.6	-	2.0	0.3	2.4
	38	図版12- 17	松崎２次	採集品		4.0	-	1.2	0.2	2.4
	39		08B	10C9o	撹乱	4.5	4.2	1.5	0.9	3.4
	40		08Aa	8C7t	D層	3.9	3.9	1.5	0.8	2.9
	41		12A2	930735	灰黄褐色極粗粒砂	4.3	4.0	1.4	0.5	2.8
	42		08B	旧調査区	旧調査区	4.0	4.0	2.0	0.5	2.4
	43		08B	10C6o	第１面検出	4.0	4.0	1.7	0.4	2.8
	44		12A2	930730	黒褐色灰黄色褐色葉理	3.4	3.4	1.2	0.4	2.5
	45		08B	10C10p	B-H-1層	3.5	3.5	1.0	0.3	2.3
	46		12A2	930735	黒褐色灰黄色褐色葉理	4.0	3.9	1.3	0.2	2.5
	47		08B	10C10o	2013SD東半	3.3	3.3	1.7	0.2	2.4
知多式０類	48	第25図14	上浜田	調査区２G11	混貝黒褐色砂層	4.5	-	4.3	3.9	2.6
	49	第25図15	上浜田	調査区２G11	混貝黒褐色砂層	4.7	-	4.7	3.8	2.8
	50	第25図16	上浜田	調査区２G11	混貝黒褐色砂層	4.7	-	5.0	4.1	2.5
０類類似	51	図版11-134	松崎Tr７	ⅢF8m	灰黄褐色砂（地山直上）	4.7	-	-	-	-
	52	図版11-135	松崎Tr４	ⅢK5o	混貝暗黄褐色砂	4.3	-	4.2	3.3	2.6
	53	図版11-136	松崎Tr7	ⅢF8m	暗黄褐色砂	4.5	-	-	-	3.6

写真１　自然釉が付着したような光沢（知多式１Ａ１類）

式的に安定しないこれらの一群を特に松崎Ｃ０類とする。

その他（図３-19・20）

上記のいずれにも属さない脚台式製塩土器２個体を「その他」とした。脚径は松崎Ａ類（Ａ２類）と松崎Ｃ類（Ｃ０類）の中間的な数値を示す。19 はいわゆる「倒杯形」の形状で黒褐色を呈する。20 は脚高が高く、筒形脚に近い形状で、「知多式祖形」ともされるが、赤褐色の色調は後述の知多式０類よりも先述の松崎Ｃ類に類似する。

知多式０類（図３-48 ～ 50）

上浜田遺跡において３個体が出土している。類似例（51・52）は東海市教育委員会による松崎遺跡の確認調査等においても出土しているが（立松・永井 2005）、愛知県埋蔵文化財センター 2008・2012 年度調査を含めた他の調査区に確実な０類の出土例は認められない。

知多式０類の脚端部は内面に折り返され、下端は板に押さえつけられたような平坦面を有する。淡黄色を呈し、著しく緻密な胎土で、堅緻に焼成される。直後の知多式１Ａ１類には外面に自然釉が付着したような光沢を生じている個体（写真１）も認められることからも、知多式０類・１類と松崎Ｃ類、あるいは「不定形な一群」を含めた脚台式製塩土器には明らかな製作上の飛躍がある。

２．編年的位置

編年

以下、三河湾沿岸の清水式、渥美半島の渥美式を含めて、伊勢湾・三河湾沿岸の脚台式製塩土器の編年的位置を確認する。土器編年との対比に際しては、主として濃尾平野の廻間式・松河戸式・宇田式編年（赤塚 1990・1994・1997、赤塚・早野 2001、早野 2011）、河内地域の庄内・布留式編年（西村 2008）を参照した（表２）。

清水式

高浜市王江遺跡、西尾市清水遺跡等において出土している脚台に叩き調整を施した清水式（清水式１類）は、大阪湾沿岸の脚台Ｉ式に類似する。脚台Ｉ式は弥生時代後期後半から庄内式併行期（下田Ｉ式からⅡ式）に存続し（西村 1996、河田 1996）、清水式の編年的位置の一端も同時期に求められる。より詳細には、王江遺跡の脚台が脚台Ｉａ式と脚台Ｉｂ式（宮地 2000）の中間的な法量を示すこと、王江遺跡において出土しているＳ字甕Ａ類を模倣した甕が全体的な器形から廻間Ｉ式４段階から廻間Ⅱ式１段階（早３期から早４期）に対比されることから（森 2005）、王江遺跡の脚台式製塩土器はおよそ庄内式古段階に対応する可能性が高い。

また、叩き調整を省略したやや小型の清水式２類を含む清水遺跡の脚台式製塩土器は、王江遺跡にやや後出する時期、廻間Ⅱ式２段階から３段階（早４期から早５期）、庄内式中段階から新段階との対応を想定しておきたい。

松崎Ａ類（渥美式Ａ１類）

松崎Ａ類は脚台の形状と法量、脚端部を内面に折り返す特徴、胎土や色調が畠貝塚（森田 2001）等において出土している渥美式Ａ１類（図３- １～ 12）に類似する。渥美式Ａ１類は杯部の形状、脚台の法量が大阪湾沿岸の脚台Ⅱ式に類似し（立松 1994、森 2005）、脚台Ⅱ式は庄内式から布留式初頭併行期（下田Ⅱ式からⅢ式初頭）に存続することから、渥美式Ａ１類、松崎Ａ類の編年的位置の一端も同時期、廻間Ⅱ式１段階からⅢ式１段階（早４期から前１

期）に求められる可能性がある。なお、脚台Ⅱ式は纏向２式（新）の奈良県桜井市纏向遺跡東田地区南溝（南部）中層におけるＳ字甕Ａ類・Ｂ類、パレス・スタイル壷を含む東海系土器群（石野・関川 1976）、庄内式古段階新相（西村 2008）の大阪府八尾市久宝寺遺跡・竜華地区 531 井戸における「東海系」の高杯の共伴（西村他 2004）から、廻間Ⅱ式前半（早４期）との接点が求められる。

畠貝塚においては、およそ廻間Ⅱ式からⅢ式併行期（早４期から前３期）の土器が出土しているが、渥美式Ａ１類、松崎Ａ類の帰属時期を特定することは難しい。渥美式Ａ１類が廻間Ⅱ式１段階からⅢ式１段階（早４期から前１期）に対応することを想定して、松崎遺跡、あるいは知多半島における土器製塩の開始も同時期に求められる可能性も示唆されているが（森 2005）、杯底部の厚さなど脚台Ⅱ式との相違（脚台Ⅱ式からの変容）も無視できないこと、松崎遺跡・上浜田遺跡に松河戸Ⅰ式１段階（前４期）以前の土器がほとんど認められないこと、すでに問題視されているように、渥美式Ａ１類と渥美式Ａ２類の帰属時期に著しい懸隔が生じること（森 2005）をも考慮して、渥美式Ａ１類と松崎Ａ類の存続時期（下限）が廻間Ⅲ式（前１期から前３期）、布留式古段階から中段階にまで下降する余地を残しておきたい。

松崎Ｃ類（渥美式Ａ２類・Ａ３類）

松崎Ｃ類は脚台の形状と法量が田原市貝の浜貝塚、青山遺跡を中心にして出土している渥美式Ａ３類（図４-21 ～ 44）に類似する。ただし、松崎Ｃ類が赤褐色から褐色に堅緻に焼成される

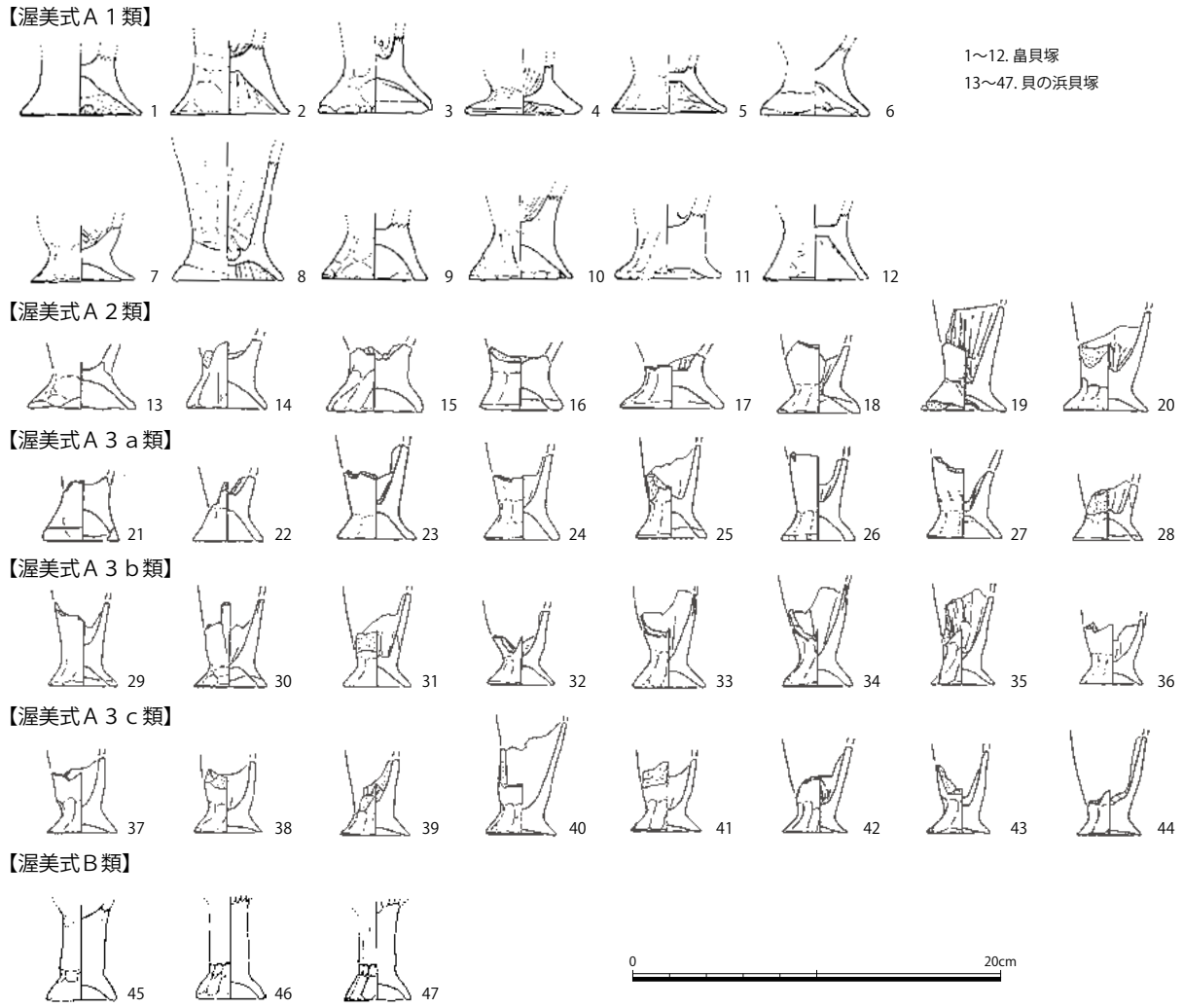
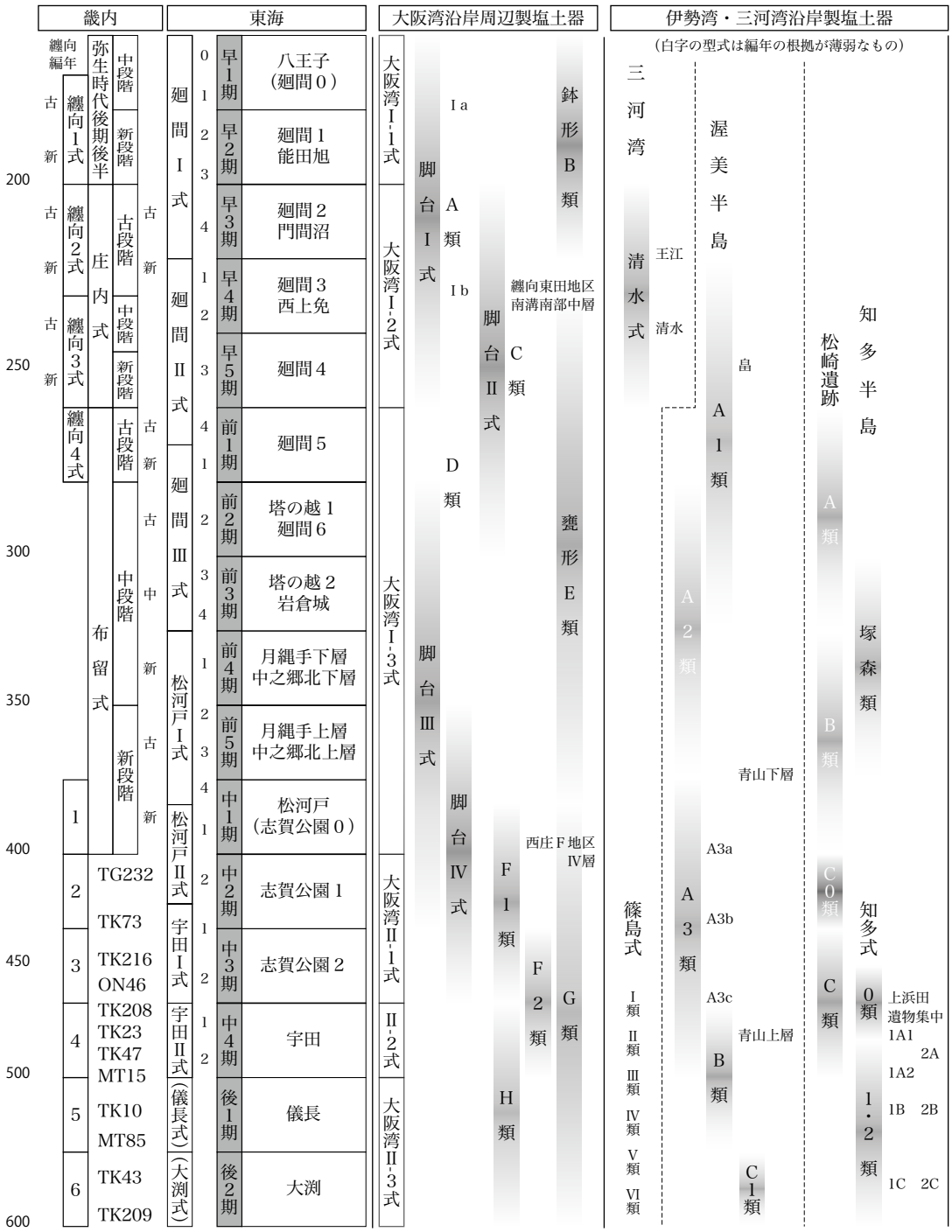


図４　渥美半島（伊川津砂嘴）の脚台式製塩土器（1:4）

表１　編年対比表



纒向編年（関川 1976）　畿内庄内・布留式（西村 2008）　畿内古墳時代中・後期土師器（辻 1999）
東海（赤塚 1990・1994・1997、赤塚・早野 2001、早野 2011 改）
大阪湾沿岸製塩土器（広瀬 1988、河田 1996、宮地 2000、積山 2004）　伊勢湾・三河湾製塩土器（森 2005 改、立松 2010 a・b 他）

特徴が松崎Ａ類と大きく異なるのに対して、渥美式Ａ３類が淡橙色にやや軟質に焼成される特徴は、渥美式Ａ１類、Ａ２類、Ｂ類と大きく異なることはない。松崎類と渥美式Ａ類の胎土の相違については、すでに立松彰も指摘している（立松 1994・2010 ａ）。

また、貝の浜貝塚の渥美式Ａ３類（143 個体）は脚高により脚高 1.1 ～ 1.7cm のＡ３ａ類（図３-21 ～ 28）、脚高 0.6 ～ 1.0cm のＡ３ｂ類（図３-29 ～ 36）、脚高 0.2 ～ 0.5cm のＡ３ｃ類（図３-37 ～ 44）に区分され、脚高が高いものが「丁寧に脚を作り出して下端も平坦で円形のものが多」く、脚高が低いものが「横に円盤状に広げたような形態」で「平坦面を作り出さず楕円形のものが多い」ことから、脚台により近いＡ３ａ類からＡ３ｂ類、Ａ３ｃ類への形態変化が想定されている（立松 2010 ｂ）。松崎Ｃ類は渥美式Ａ３類でもＡ３ｂ類、Ａ３ｃ類に対応し、Ａ３ａ類に対応する個体は認められない。一方、松崎Ｃ類には（脚台がより形骸化した）脚台内面の窪みが完全に消失し、脚台底面が突出した個体（図３-29・30）までもが認められるが、同様の個体は渥美式Ａ３類には認められない。このことから松崎Ｃ類は貝の浜貝塚の渥美式Ａ３類にやや後出すると思われる。

問題は渥美式Ａ１類に後出する渥美式Ａ２類、Ａ３類の編年的位置である。渥美式Ａ２類の脚台の法量は大阪湾沿岸の脚台Ⅲ式に近似し、渥美式Ａ３類、松崎Ｃ類の脚台の法量は脚台Ⅲ式と脚台Ⅳ式の中間に位置する（森 2005）。これを重視すれば、渥美式Ａ２類が布留式中段階から新段階、廻間Ⅲ式２段階から松河戸Ⅰ式（前２期から前５期）、渥美式Ａ３類が松河戸Ⅱ式から宇田式（中１期から中４期）に対応し、（渥美式Ａ２類に後出する）松崎Ｃ０類は松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式、（貝の浜貝塚の渥美式Ａ３類にやや後出する）松崎Ｃ類は宇田式に対応することが予測される。

貝の浜貝塚においては、渥美式Ａ２類に対応する脚径 4.2 ～ 5.4cm の脚台式製塩土器（図３-13 ～ 20）が 165 個体中 22 個体含まれ、同貝塚においては、廻間Ⅲ式２段階（前２期）に併行する小型器台と丸底鉢も出土していることから（立松 2010）、渥美式Ａ２類の上限も同時期に求められる可能性がある。

青山遺跡における渥美式Ａ２類、Ａ３類の出土状況を改めて検討した結果を参照すると、青山遺跡 1949 年調査Ａ地点竪穴上層に渥美式Ａ２類、Ａ３類と東山 11 号窯式期の須恵器、同Ｃ地点竪穴にＡ３類と東山 11 号窯式期の須恵器、1953 年調査Ｂ地点貝層と 1966 年調査第１号竪穴住居にＡ２類、Ａ３類、Ｂ類と東山 11 号窯式期（から東山 10 号窯式期）の須恵器が共伴するとされる（芳賀 1959、小林 1987、森田 2001、森 2005）。森泰通は以上の出土状況を重視して、渥美式Ａ２類とＡ３類は同時期の法量差を示すもので、両者はほぼ東山 11 号窯式期に対応するとした。ただ、渥美式Ａ２類は 1949 年調査Ａ地点竪穴にのみ含まれ、同竪穴下層において出土する土器は松河戸Ⅰ式４段階から松河戸Ⅱ式１段階（中１期）の土師器を主体とすることから、渥美式Ａ２類の時期の一端、渥美式Ａ２類からＡ３類への推移が同時期に求められる余地も考慮しておきたい。

なお、大阪湾沿岸周辺で脚台Ⅳ式はほとんど単独で出土せず（広瀬 1988、積山 2004 など）、和歌山県和歌山市西庄遺跡Ｆ地区包含層（Ⅳ層）においては、脚台Ⅲ・Ⅳ式（図５- ３～６、積山洋による分類のＤ類）と甕形の製塩土器（同 10 ～ 12、同Ｅ類）、丸底式の初現とされる製塩土器（同７～９、同Ｆ１類）が混在する（冨加見他 2003）。同Ⅳ層は、石敷製塩炉の基盤となるⅢｃ層下位に堆積する須恵器を含まない遺物包含層で、Ｓ字甕Ｄ類新段階（同１）と宇田型甕１類（同２）が共伴する*。このことからも、大阪湾沿岸において脚台式から丸底式に交替する時期（積山編年における大阪湾Ⅰ式からⅡ式への変化）は松河戸Ⅱ式（中１期から中２期）に接点が求められ、脚台Ⅲ式・Ⅳ式（Ｄ類）と渥美式Ａ２類・Ａ３類との接点を同時期に担保

* 西庄遺跡Ｆ地区包含層（Ⅳ層）出土の「東海系の台付甕」として、１点のＳ字甕Ｄ類新段階（図５-1）が報告されているが、別個体の可能性が高い宇田型甕１類（同２）が含まれていることを確認した。両者は伊勢湾沿岸から搬入された個体である。同層において出土している脚部（同３）は脚台式製塩土器の可能性も示されているが、（Ｓ字甕または宇田型甕以外の）台付甕の脚部で、Ｓ字甕、宇田型甕と同様に伊勢湾沿岸から搬入された可能性がある。なお、同地区の包含層（Ⅲ～Ⅳ層）において、鉄鋌が出土していることも興味深い。

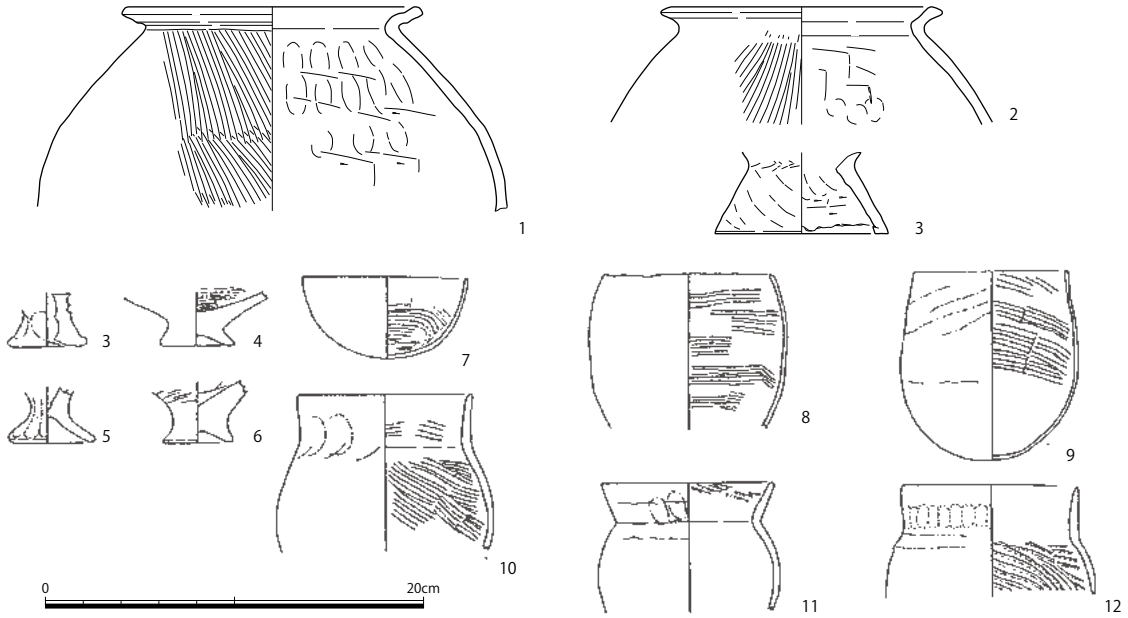


図５　西庄遺跡Ｆ地区包含層（Ⅳ層）出土Ｓ字甕・宇田型甕と脚台式・甕形・丸底式製塩土器（1:4）

することも可能である。

松崎Ｂ類

近隣地域に松崎Ｂ類に類似する脚台式製塩土器は認められず、編年的位置を推断するのは難しい。法量（脚径）は松崎Ａ類と松崎Ｃ類の中間に位置（渥美式Ａ２類に対応）し、焼成具合が松崎Ａ類と松崎Ｃ類の過渡的な位置にあると考えられることを重視すれば、編年的位置も松崎Ａ類と松崎Ｃ類の中間、松河戸Ⅰ式から松河戸Ⅱ式（前４期から中２期）に求められる。つまり、備讃Ⅳ式（大久保 1994）・脚台Ⅲ式に類似し、松河戸Ⅰ式との対応が想定される塚森類*（図６）とも時期が重複する可能性が推測される。

知多式０類

知多式０類はすでに報告されているように（立松・永井 1999）、上浜田遺跡調査区２遺物集中部において宇田Ⅱ式１段階（中４期古）の土師器、城山２号窯式の須恵器を伴い、編年的位置も同時期に求められる。つまり、松崎Ｃ類とも時期が重複する可能性が高い。

* 塚森類の大半は塚森遺跡（立松他 1984）、トゝメキ遺跡（立松他 1988）で出土しているが、塚森遺跡は 10 点中８点が脚径 3.9 ～ 4.8cm、トゝメキ遺跡は９点中８点が脚径 3.5 ～ 3.8cm で、若干の法量差がある。また、前者はくすんだ黄褐色でやや堅緻、後者は灰白色のやや軟質な焼成で、脚台には叩き調整が表面化するものが多い。両遺跡の様相差が時期差を反映している可能性もあるが、前後関係を含めて詳細を明らかにすることは難しい。

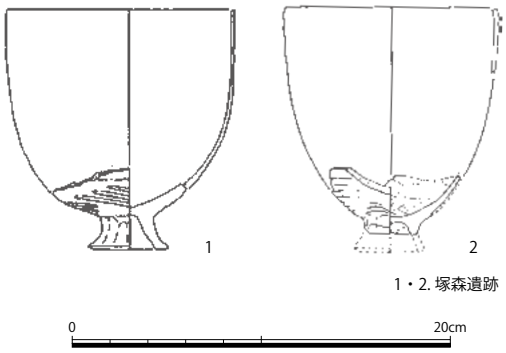


図６　塚森類製塩土器（1:4）

３．出土分布

各型式の脚台式製塩土器と知多式０類の分布は愛知県埋蔵文化財センター調査 08 Ｂ・12 Ａ区北部から第１次・第２次発掘調査Ⅰ区・Ⅵ区・Ⅶ区にかかる南北約 80 m、東西約 20 mの範囲、上浜田遺跡（東海市教育委員会 1998 年調査区）の南北約 20 m、東西約 20 mの範囲、標高 3.0 m付近の微高地南西端付近にほぼ限定される（図７）。前者の分布域を松崎地区、後者を上浜田地区とすると、Ａ１類、Ａ２類、Ｂ類は松崎地区のみ、Ｃ０類と知多式０類は上浜田地区のみの 10 mから 20 m程度の範囲に、Ｃ類は両地区の 30 mから 40 m程度の範囲にまとまっ

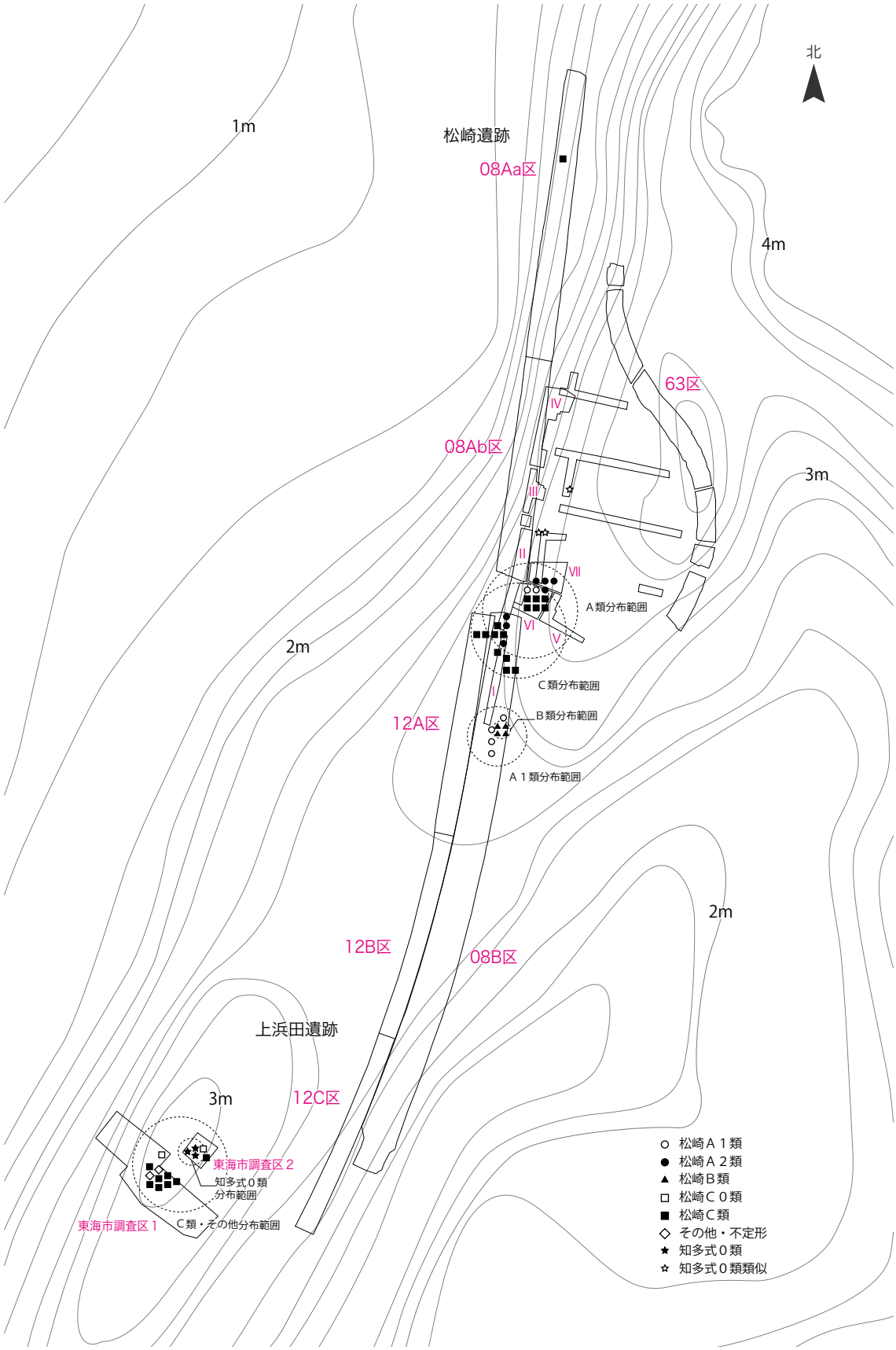


図７　松崎遺跡・上浜田遺跡における脚台式製塩土器（松崎類）と知多式０類の分布（1:2,500）

て分布する状況を示す。なお、松崎地区において先行するＡ１類、Ａ２類、Ｂ類がＣ類の縁辺に分布する傾向は、Ｃ類による土器製塩に際して作業面が更新され、先行するＡ１類、Ａ２類、Ｂ類の脚台式製塩土器が周囲に二次的に移動したことを示している可能性がある。

また、知多式０類が出土した付近に知多式１類は出土せず、上浜田地区においては０類に後続する１Ａ１類は出土していない（１Ａ２類以降の型式が出土）。一方、東海市教育委員会による松崎遺跡の確認調査において出土した０類類似とされる製塩土器は、１Ａ１類を多く含む１類の廃棄層付近において出土している。

前段における編年的位置を参照すると、松河戸Ⅱ式（中１期から中２期）以前はＡ１類、Ａ２類、Ｂ類による土器製塩が松崎地区においてのみ、松河戸Ⅱ式から宇田Ⅱ式（中２期から中４期）にはＣ類による土器製塩が両地区に、知多式０類による土器製塩は上浜田地区においてのみ行われ、知多式１類成立前後には操業が面的に拡大したと推測される。また、出土分布からは、知多式０類と知多式１類による土器製塩は必ずしも連続的な操業ではなかった可能性も看取される。

４．まとめ

松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器の分類、編年的位置、系譜、出土分布について検討した結果を以下に列挙する。

・「松崎類」として一括されていた松崎遺跡の脚台式製塩土器を法量、焼成等からＡ類、Ｂ類、Ｃ類に大別し、Ａ類はＡ１類とＡ２類、Ｃ類はＣ類とＣ０類に細分した。

・大阪湾沿岸の脚台式製塩土器、渥美式製塩土器との対比を通じて、およそ松崎Ａ類が廻間Ⅲ式（前１期から前３期）、松崎Ｂ類が松河戸Ⅰ式からⅡ式（前４期から中２期）、松崎Ｃ０類が松河戸Ⅱ式（中２期）、松崎Ｃ類が宇田式（中３期から中４期）に使用時期の一端があることを想定した。

・松崎Ａ類は渥美式Ａ１類との密接な関係が類推されるが、塚森類を含めてそれに後続する松崎Ｂ類、松崎Ｃ０類は、系譜の脈絡に乏しい。松崎Ｃ類は渥美式Ａ３類に類似するが、胎土、焼成には明らかな差異も表出する。また、松崎類から「不定形な一群」を介したとしても、宇田Ⅱ式１段階前後に成立する知多式０類への連続した変化を認めることは現状においてもなお難しい。

・出土状況から、脚台式製塩土器による土器製塩は知多式０類を含めて、30 mから 40 mの小範囲でごく限定的に行われたと推測され、知多式１類以降の操業とは明らかな飛躍がある。

おわりに

以上にまとめたように、松崎遺跡・上浜田遺跡における知多式０類以前の製塩土器は系譜が不連続で、渥美半島の伊川津砂嘴において、渥美式Ａ類からＢ類まで連続した変化が看取されることとは対照的である。つまり、伊川津砂嘴、渥美半島において渥美式Ａ類からＢ類にかかる土器製塩が継続的で、比較的安定していた点と比較して、松崎遺跡・上浜田遺跡、知多半島における知多式０類以前の土器製塩は操業が不安定であった可能性が高い。知多式１類成立の経緯と背景についても、こうした知多式以前の諸状況を踏まえて改めて評価する必要がある。

知多式の成立後、松崎遺跡・上浜田遺跡における土器製塩は明らかに大規模化する一方、ほぼ同時期、渥美式Ａ３類からＢ類に推移する段階の伊川津砂嘴の製塩遺跡の位置は相対的に低下し、逆に知多式１類の製塩土器ももたらされるようになる。松崎類から知多式製塩土器への交替は、伊勢湾・三河湾沿岸における土器製塩の大きな転換を意味していた。すでに松崎遺跡・上浜田遺跡における土器製塩の歴史的な意義については詳述しているが（早野 2005・2010・2012）、知多式以前の土器製塩の状況から、その意義がより鮮明になったことは確かであろう。

しかし、脚台式製塩土器の編年的位置を推定した根拠はなお薄弱で、層位や伴出遺物に即したより厳密な出土状況の検証が不可欠であろう。また、製塩土器の系譜についても不確かな部分が多く、立松彰や森泰通が指摘するように（立松 1994、森 2005）、能登地域なども含め

た広範な地域との比較検討も必要である。全ては今後の課題としたい。

小文作成の過程において、以下の方々、諸機関のご高配があった。記して感謝する。

積山　洋　　立松　彰　永井伸明　萩野谷正宏
冨加見泰彦　増山禎之　宮澤浩司　森　泰通
田原市教育委員会　東海市教育委員会
和歌山県立紀伊風土記の丘資料館

参考文献

赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第２号　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
石野博信・関川尚功 1976『纒向　奈良県桜井市纒向遺跡の調査』橿原考古学研究所・桜井市教育委員会
大久保徹也 1994「岡山県」『日本土器製塩研究』青木書店
河田泰之 1996「大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター調査報告書第 18 集　財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター
小林久彦 1987「青山貝塚出土の土器について」『ホリデー考古』第７号　ホリデー考古刊行会
杉崎章他 1977『松崎貝塚』東海市教育委員会
関川尚功 1976「纒向遺跡の古式土師器―纒向１～４式の設定―」『纒向　奈良県桜井市纒向遺跡の調査』橿原考古学研究所・桜井市教育委員会
積山洋 2004「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『季刊考古学・別冊 14　畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣
立松彰 1994「愛知県」『日本土器製塩研究』青木書店
立松彰 2010 a「伊勢湾と三河湾の製塩土器」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
立松彰 2010 b「渥美半島伊川津砂嘴の遺跡―貝の浜貝塚の遺物―」『渥美半島の考古学―小野田勝一先生追悼論文集―』田原市教育委員会
立松彰他 1984『松崎貝塚第２次発掘調査報告書　付載　塚森遺跡』東海市教育委員会
立松彰他 1988『トゝメキ遺跡』東海市教育委員会
立松彰・永井伸明 1999『上浜田遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
立松彰・永井伸明 2005『松崎遺跡確認調査報告』東海市教育委員会
辻美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集―』大阪大学考古学研究室
西村歩 1996「和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡』財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター調査報告書第 18 集　財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター
西村歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『シンポジウム「邪馬台国時代の摂津･河内･和泉と大和」資料集』香芝市教育委員会･香芝市二上山博物館
西村歩他 2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 118 集　財団法人大阪府文化財センター
芳賀陽 1959「青山貝塚－渥美半島における古代漁村の土器－」『古代学研究』20　古代学研究会
早野浩二 2005「臨海の古墳時代集落―松崎遺跡の歴史的素描―」『研究紀要』第６号　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二 2010「製塩遺跡の空間構成についての基礎的研究」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
早野浩二 2011「東海」『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』同成社
早野浩二 2012「松崎遺跡と知多半島の土器製塩」『東海の古代③　尾張・三河の古墳と古代社会』同成社
広瀬和雄 1988「近畿地方における土器製塩―大阪湾周辺を中心として―」『考古学ジャーナル』298　ニュー・サイエンス社
冨加見泰彦他 2003『西庄遺跡』財団法人和歌山県文化財センター
福岡晃彦他 1991『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 20 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
宮地聡一郎 2000「脚台式製塩土器について」『小島北磯遺跡』財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター調査報告書第 54 集　財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター
森泰通 2005「愛知県における脚台式製塩土器の研究」『考古学フォーラム』17　考古学フォーラム
森田勝三 2001「渥美半島の脚台式製塩土器」『石巻文化財』第 10 号　豊橋市石巻地区文化財保存会